

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



仔牛

仔牛は日向に
たっていた

細い四足すつきり伸びて
小さいひづめは繫はなふんで。

日永、半日
たっていた

青いお目々は牡丹をみつめ
黒いお鼻は匂いにぬれて。

すると日暮れにお角が生えた。
空に小さく三日月でた。

岩田 智代

創作人

<http://fff352.akazunoma.com/>

1983年、三重県生まれ。
絵やおはなしを作っています。

絵について

仔牛は長い時間たっていたので、
せめてゆっくり丁寧に描きました。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

何回も推考を重ねられたこの詩は、はじめは先の四連までで終わっていた。だが決定稿では最後の二行が付け加えられた。この二行はこの作品の質を高める上で大変大きな役割を果たしている。まず、読者の視点が、はこべらの這っている地面から牡丹の咲く空間へ、そして、三日月のかかった大空へと誘われ、日暮

れまでの時間が実感として感じられるようになった。そして、立ちつくしていた仔牛の体内で角が育っていた、という想定が、やさしい小さな作品に確かな生命力と幅を与えることとなった。早春の日向に、日永、半日立ちつくしていた仔牛の、しなやかで、おのように美しい姿態が、見事に表出された作品だ。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を勤める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。